

絶望から希望の想像力を描く人

鈴木 比佐雄

崔仁浩小説集『他人の部屋』に寄せて

1

友人の井手俊作さんから二〇一一年の秋に電話があった。崔仁浩という韓国のベストセラー作家の初期の小説集『他人の部屋』を、韓国文学翻訳院の支援を受けて翻訳したのでコールサック社で刊行して欲しいという要望だった。私は内容の概要をその電話で聞いて即座に了承した。なぜなら翻訳は最終的には翻訳者の異文化理解と文章能力であり、私は井手さんの異文化理解と文章能力を高く評価していたからだ。

今から十年ほど前、私達は私の暮らす柏市で毎週土曜日の午前中開かれている韓国語教室の仲間だった。井手さんは隣の松戸市に住んでいた。ある日、ラッシュアワーを過ぎて人もまばらな都心に向かう各駅停車の千代田線の中で井手さんの姿を見かけた。韓国語の絵本を片手に持ち、声は出さないが、口を動かしながら楽しそうに読んでいた。私はその幸福そうな姿を今もありありと思い出す。井手さんにとって至福なひと時だと思い、その少年のような姿を眼に焼き付けて気付かれないように

下車したのだった。井手さんの姿は何か外国語を学ぶ原点を見るような思いがしたのであった。

井手さんはきつと韓国の子供のように絵本から始まり、徐々に童話、韓国映画・テレビや、その原作の小説に向かっていき、さらに今回の純文学の高度な比喻を駆使した小説を理解し、その翻訳を手掛けていったのだろう。また井手さんは福岡出身で韓国とも近く、韓国を身近に感じていたのだろう。そんな井手さんが新聞社を定年退職後、ライフワークとして韓国小説の翻訳を本格的に始めたのは自然なことだった。

2

井手さんの翻訳された崔仁浩小説集『他人の部屋』を読んでいると、どうしてこの一九六〇年代から一九七〇年初めにかけて書かれた韓国の最下層の少年たちの実相を描いた短中編小説集に心惹かれたかがよく分かる気がした。崔仁浩氏は一九四五年に生まれ、井手さんは一九四八年に生まれた。海を隔ててはいるが、第二次大戦、朝鮮戦争を経た焼け野原の記憶の痕跡がまだ生々しい出来事として語られていた幼少時代を二人は過ごしただろう。井手さんにはきつとアジアという観点でいえば、崔仁浩氏はアジアの戦後社会を生き抜いてきた苦労人の兄のような存在だと思われたのではないか。崔仁浩氏の今回の小説に出てくる登場人物たちの相貌は、日本の焼け野原の戦後社会に放り出された孤児たちと重なってくるが、その少年たちよりもっと貧しく、先の見えない絶望を抱えても、何か精一杯生きている存在として描かれている。崔仁浩氏の小説の発想は、日本人が決して想像することの

出来ない個性的なテーマであり、また私たち日本人が見ようとしてこなかった隣国の実相を初めて突きつけられる思いがしてくる。井手さんがこの翻訳をやり遂げた情熱は、きつとまだ貧しかった戦後社会の不条理な社会の中で死んでいった人びとの苦悩や喜びを描いた崔仁浩氏への深い尊敬の念があったからだろう。

私はこの小説集のタイトルにもなった「他人の部屋」の翻訳を何度か読んでみて、不思議なことに実存主義の源泉と言われるキルケゴールの「死に至る病」やフランスの哲学者サルトルが一九三八年に発表した小説「嘔吐」が想起されてきた。崔仁浩氏という作家の思想性や言語思想が、六十年代、七十年代の混沌としていた世界と共にあって、韓国人の小説でありながら、人間を物象化していくことに抵抗する実存主義や存在論の問いを濃厚に感じた。私は七十年代の半ばに大学の哲学科に在籍していて、日本のキルケゴールの翻訳の草分けだった梶田啓三郎のキルケゴールのゼミで「おそれとおのき」を読んだり、ジャコメッティの彫刻のモデルにもなった矢内原伊作教授のサルトルのゼミで小説「嘔吐」を読んでいた。東西冷戦が続き、南北問題が少しも解決されず、学生運動が敗北し、オイルショック後で物価が倍になるなど、様々な問題が吹き出していた。私もまた三歳下の弟を亡くして生きる意味を探りながら、実存主義や存在論などの問いを発していた青年の一人だった。サルトルの語った「実存は本質に先立つ」という考えは、当時の若者たちに大きな影響を与えた。人間は自分の人生や行動に、意味を求めても得ることは出来ないが、偶然を精一杯生きて社会に参加し情況の壁を

乗り越えていくことの意義を「アンガージュマン」という言葉でサルトルは主張し、その思想の根底に貫かれている人間の自由を自らも実行した。私は崔仁浩氏の「他人の部屋」にも人生の徹底した無意味さを痛感させられ、人間だけでなく物たちへも嫌悪感を抱き、生きられない瞬間に追い込まれていく主人公たちのカストロフィーを濃厚に感じる。けれども崔仁浩氏はその破滅の瞬間に僅かな希望の光を垣間見せてくれる。人間や物たちとの和解というか親和性の可能性を感じさせてくれる。その意味ではサルトルのいう「嘔吐」を踏まえて、メルロー・ポンティの心と身体の相互浸透を考察した「両義性」（あいまいさ）の哲学に近いように思われる。サルトルやメルロー・ポンティに影響を与えた現象学の創始者であるフッサールは、主観と客観の二元論の根底にある超越論的主観を構想した哲学を創り出した。先入観を抱かない「現象学還元」で事実を「本質直観」し、「純粹意識」である「超越論的主観」を見出そうとフッサールは考えてそれを記述しようとした。そして人間の「生活世界」に生きる感動でもある「純粹意識」を取り戻そうと試みたのだ。

「他人の部屋」の中年男の主人公は、出張帰りにアパートに戻るが、ベルを押してもドアを押しても妻は出てこない。隣のアパート住人が出てきて苦情をいい、三年暮らしているが一度も見かけたことがないと不信がる。部屋に入り書き置きを見ると、妻が父の危篤で実家に帰るとい置き手紙を発見する。男は部屋の中に残された妻の痕跡である止め忘れたラジオ、ストッキング、ゴムひも、口紅、パンのかけら、狂っている卓上時計などにいらだちながら、なぜかリアリティーを取り戻していく。次に浴室で妻の髪の毛や垢が残った残り湯を洗い流し、洗面所で錆びた剃刀で血を流しながら

髭を剃りちり紙を顔に付ける。その時に浴室の鏡に映った顔を「郵送される小包」のようだと喩える。崔仁浩氏の比喩は、想像を超えた驚きを与えてくれる。それは人間が生きたままで物象化された悲しみを根底に秘めているからだろう。その浴室の鏡に貼り付けられた妻が残したガムを主人公は発見して「くすくす笑った」りして、その干しぶどうのようなガムを噛みながら、妻の存在を感じて愉快になり歌を歌いだす。そしてシャワーで全身をゆっくり洗い流して、身体の疲れを癒していく。その意味ではこの場面などは心と肉体が一体感を取り戻す瞬間であり、メルロー・ポンティ的な描写だろう。しかし浴室から出てソファで粉末ジュースを作り、プレーヤーで音楽を聴き、妻の手紙を思いだすと状況は一変する。止めたはずのシャワーが流れだし、台所から音がして石油コンロの火がついていて、ひどい孤独感を感じる。その後には、全ての家具が明るいい色調で輝きだし、スプーンが生きもののように勝手に動き出し宙を舞う。室内の暗闇から囁きが聞こえたり、ソケットの穴からも声が聞こえたりする。その穴からラジオのような緊急ニュースが流れてくる。そのように部屋の全ての家具やクレヨン、ドライフラーなどの物たちがいつせいに自己の存在を主張してくる。そうこうしているうちに男は全身が硬直して「彼は静かに足をそろえて直立した。彼はまるで復活するもののように見えた」と崔仁浩氏は記している。この箇所は、いつの日か男が「復活」という希望を残していて救いとなっている。世界が輝きだして過剰な存在物に「嘔吐」し、自分の生命力が吸いとられてしまい、物のようになってしまった存在者に「復活」の可能性を残したことは、崔仁浩氏は人間存在の幸せを願って小説を書いている証拠となる。最後に翌々日に妻と思しきある女性が部屋に入っ

てきて、物になった男の品物にキスをして、ゴミ箱に捨ててしまう場面は、この世界の無関心な冷酷さを感じさせている。この「他人の部屋」という小説だけ取り上げても、崔仁浩氏の小説世界が提示している課題は、二十一世紀の今においても切実に読者の心に迫ってくるだろう。

3

その他の作品も紹介をしてみたい。第一章の「酒飲み」は、酔っぱらいの小さな子どもの話だ。孤児院から抜け出したその少年は、母が血を吐いたので父を探しに來たと言って、盛り場に入ったり酔っ払いの男たちにかかわれ、酒を盗み飲み、アルコール中毒になっていく。少年でありながら中年の父のように人生に絶望した存在は、酒や麻薬でも飲まなければ生きていけない人間存在のありようを突きつけている。親から捨てられた孤独な少年の魂が親を探す悲壯感が乗り移った文体に引き込まれていく。しかし最後の「明日こそは間違いなく父を探し出せると断定した。」という一行は、いつの日か父を見出し新たな関係にしたいという願いを込めている。

「模範童話」は、朝鮮戦争で妻と二人の子どもを失い、三千人の子どもたちのD小学校の前に雑貨商店を開いたカンさんの話だ。朝鮮戦争での武勇伝の作り話で子どもたちの心をつかんだカンさんは子ども向けの賭博ゲームを作りお小遣いを巻き上げていた。その学校の六年一組に〈物知り博士〉と言われた少年がやってきた。少年は六年生全員で見に行ったサーカスの手品のからくりをことごとく暴いてしまった。またカンさんの作った賭博ゲームを少年は必ず勝ってしまうのだ。カンさんは軍隊

仕込みのゲームで戦いを挑むが、負けてしまう。少年は友達に「僕がいけなかった」「あのひげおやじは死ぬよ」という。するとカンさんはその通りになってしまう。友達は少年が泣いていることを知り気が重くなる。プライドや命を賭けてまでゲームに情熱を燃やし破滅していく人間存在の不可思議さを感じさせてくれる。

「予行演習」は、失業中の体格が良く大人びた十五歳の少年チェ・ホジュンと偶然であつた少女のようなイ・ムンスが、町役場の掲示板で募集告示を見かけた博愛孤児院でアルバイトをする話だ。アメリカの富豪から資金を援助されている孤児院は、視察に訪れる富豪を騙すために、少年たちを集めて孤児の演技をさせようとする。チェ少年は、院長から五十八名をまとめる分隊長にさせられて、行進の先頭で皆を統率する立場になる。真夏の院庭を行進させられて倒れるものたちも出てくる。それでも教官は少年たちを行進させる。夜になり休んでいると院長はいなくなり、残された少年たちは騙されたとわかり、その憎悪を教官とチェ少年にむけてリンチする。横たわったチェ少年にイ・ムンスは身体をすり寄せてくる。貧しい少年を騙す大人社会の絶望を抉っている。崔仁浩氏のみずみずしい文体が少年たちの焦燥感と他者としてあう官能性を見事に描いている。

その他の小説もとても魅力的で例えば「沈黙の声」は、女を騙して金を盗んだ二人兄弟の弟の方が自殺をしてしまう話だ。「処世術概論」は、金持ちの伯母の財産をめぐる争いに負けた父とその子が最後に人間のプライドを取り戻す話だ。二章の「見習患者」は、肋膜炎で長期入院した男が、決して

笑わない無表情の医師たちを笑わそうと試みる話だ。「斜行」は、隣に引っ越してきた女に妄想を抱くが、夫婦仲や日常を再発見していく医師の話だ。「未開人」は、ベトナム戦争で左足を不自由にした若者が、ハンセン病患者の村の子どもたちの尊厳を守る話だ。三章の「黄真伊Ⅰ」「黄真伊Ⅱ」は、韓国の歴史上の人物の黄真伊の美意識ある生き方に命を吹き込み現代に甦らせる話だ。

私は崔仁浩氏の小説集『他人の部屋』を日本人が読むことになって、戦後の韓国人しか書けない情況を描いた感受性であると同時に、日本を含め世界の共有財産である現代人の内面を描いた作品であることを理解してもらえるのではないかと期待している。きっと日本の読者は崔仁浩氏の小説の語りつくせない魅力に気付くに違いない。この小説集がコールサック社の「韓国純文学シリーズ」の第1巻であることを誇りに思う。著者の崔仁浩氏、翻訳者の井手氏、韓国文学翻訳院の関係者たちに心から感謝の言葉を伝えたい。